

敦煌文献より見られる宗教儀礼の諸相

徐 銘

広島大学大学院総合科学研究科

The Various Aspects of Rituals Seen from Dunhuang Manuscripts

Ming XU

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

I. 問題の提起と研究目的

敦煌文献は1900年に敦煌地域にある莫高窟第16窟から大量に出土されて以来、それをめぐる諸分野の研究がイギリス、フランス、ロシアをはじめとするヨーロッパ、また日本、アメリカ、さらに中国において多数の研究者によって進められてきている。その中でも、特に文献翻刻、俗字の釈義などの基層的な作業が学者の目を惹く。それらの文献の内容及び歴史背景、中国宗教史上の位置づけ或いは価値を解明しうる第一歩と考えられるためである。しかし、その文献群があまりにも莫大であり、戦乱で海外に流失したり、また後世に作られた偽作が混入したりしたこともあり、この研究はまだ継続中である。

敦煌文献の内容はきわめて多岐にわたっているが、最も多いのは宗教典籍であり、そのうちに仏教典籍は全体のおよそ90パーセントを占め、他に道教や景教、マニ教をはじめとする三夷教などの典籍がある。また、経典資料、戸籍その他の社会資料や敦煌寺院の日常寺院活動の記録以外に、民衆、庶民の生活または庶民の宗教活動、信仰、即ち宗教と民衆との関わりを生き生きと窺い知り得る資料は相当数見られ、それらを多方面から検討

した論考も続々と出されている。その類の文献の中には、僧侶が世俗の一般民衆に対して仏経を読み聞かせる際に使用したテキストがあり、民衆のために行われた法会や齋会などの儀礼を記載し、さらに民衆が自ら普通生活において行われた儀礼の詳細が書写されている。儀礼の遂行は、宗教者がその教義を宣伝するための主要な手段である。儀礼によって聖と俗の間は長い歴史の中で交流を続け、宗教に対する信仰を深めてきた。信仰と儀礼との関係は、お互いに促進させる重要な関係であり、宗教の確立と普及において儀礼は欠かせないものである。

唐代初期に朝廷、貴族社会を中心とした宗教儀礼は盛んに行われることは、伝世文献や仏教典籍などにその状況が窺える。その行動は主に法会や齋会という形相によって実施されていた。また、儀礼の変遷にともない、その宗教自体が発展するばかりか、さらには付随する芸能、文芸の展開へと関わっていったことも見落とせないところであろう。儀礼遂行に伴った盛大な芸能が行われたと分かるが、儀礼と芸能はどのように繋がりが上げられたか、つまり儀礼から芸能への受容過程を検討する必要があると思う。そこで、おおよそ唐代末期から宋代初期に至る敦煌文献にある宗教儀礼写

本を考察し、当時の宗教者が儀礼にいかなる意義付けをしていたか、儀礼と社会において生活していた民衆の関わりを知ることは、こうした問題を解明する上で重要であろう。

しかし、周知のように中国の民衆は元来儒教の思想を持ちながら、民族宗教である道教の信仰を深く受け入れたが、その後、中国社会に入り込んだ仏教や密教の思想がどのように民衆に受容されたかは宗教儀礼の遂行が直面した当初の難関だと思われる。宗教思想と宗教を受けずに形成された社会思想はきっと合致できないが、例えば、インド将来の仏教は無常・無我・出家などの思想を宣伝し、従来の中国思想と矛盾しており、なかなか宗教思想を吸い込むことは容易ではなかろう。そこで、宗教思想がどのように受け容れられたかについて、宗教儀礼がその役割を果たしたと検討すべきであろう。また、民衆が一般社会において生業生活の中に祛病除災、延命長寿、現世安寧、来世幸福などの様々な願望が出てきていると考えられるため、どのようにその願いを表し出させるかは当時の儀礼において重要な内容だと考えられる。これらはすべて宗教儀礼の受容に対してまず克服しなければならない課題であろうか。宗教儀礼と中国伝統的な思想、文化との融合をどのような方法で研究すべきであるかという疑問に取り組んだ際、儀礼に焦点を合わせることによって、庶民生活に取り入れられ、民衆へ接近し、宗教、文芸の民衆化という受容過程を明らかにしなければならないと考えている。さらに、敦煌文献に書写された宗教儀礼に関する記載内容は、当時の文学の主要な表現形式として、唐代及びその後、宋代の文学に至るまで、中国文学の上に、或いは中国思想の上に、大きな影響を及ぼしてきたと言えるが、宗教儀礼は一体どのように文学へ影響を与えたか、儀礼の変遷に伴って文学がどのような方向へ展開されたか、一連の課題を明らかにするためには、敦煌文献より見られた宗教儀礼の具体的な様相または受容過程を考察しなければならない。

II. 研究内容

宗教儀礼の研究は儀礼本来の意味を問うと同時に、儀礼と民衆思想、社会生活との関わり、文芸への影響などを総括的にとらえなければならない。そのため、本研究は敦煌文献に含む宗教儀礼を主に以下のような三つの面から検討してみよう。

1. 儀礼の実体と実修：儀礼の本質と宗教の作法
2. 儀礼の民俗的実践：儀礼の変質と通俗化、民俗との融合
3. 儀礼から文芸へ：儀礼からの乖離

具体的には以下のように検討を進める。

1については儀礼が本来に持っていた礼拝と受戒という意味及び宗教的作法よりその実体性質及び実修情勢を考察する。まず、讃嘆や懺悔、祈祷を中心とした儀礼を取り上げて、儀礼の位置づけ及びその役割を探求する。それによって、宗教儀礼は本質を果たすために本来の宗教思想に中国伝統的な儒教の思想を融合させた様相を明らかにする。続いて具体的な宗教的法会や齋会の状況を検討する。敦煌文献に見られた代表的な儀礼に関する文献写本は、従来では仏教の民衆への接近という齋会儀礼の通俗化を探求するための格好な資料と見られるため、その齋会儀礼または儀礼内容の生まれ変わり、また当時、敦煌地域における在家・出家の両形相を兼ねる宗教信者の儀礼実修の内容と形式を検討し、伝統思想を取り入れながら、宗教信仰の受容状況を論じる。

2については、死者に関する民俗的特徴が著しく見える葬送儀礼の状況について考察する。唐、五代時期に行われた葬送儀礼は中国伝来の民俗信仰などと密接な繋がりを持つため、地獄、葬送儀礼や孝子故事などの内容を中心とした講経文や願文、王梵志詩などの敦煌宗教儀礼文献を整理しながら、それぞれの性格を考察する。さらに葬送儀礼をめぐる齋儀のありかた、齋会と民衆との関連性を明かし、儀礼の民俗的実践のルーツを辿り付けることができると思う。次に、喪祭儀礼に関わる文献を考察する。それらの文献は主に民衆が親

族の死に対して行われた法会や齋会を記したものであり、その内容を検討し、死者への追福の願いを表す宗教儀礼としてどのように伝統的な民俗信仰を受け入れたかを明確にする。また、その宗教儀礼を記載した文章の筆致は実用から文学へと展開している様子をも窺えるため、儀礼の通俗化過程をも論じることができよう。

3については、儀礼としての宗教行為が民衆と接触するうちに、儀礼本質から乖離した変遷過程を考察する。主に後世文学作品に与えた文体上の影響を考察することを通じて、講唱文学の間にある継承と発展の関係を検討し、敦煌宗教儀礼文献から生み出した影響、つまり宗教儀礼が文学という新しい身体として生き続けていくという課題を明らかにする。

Ⅲ. 論文の構成

本論文は、敦煌文献に記述された儀礼行為やその形態や実態を従来の枠組みにとらわれることなく、上述した研究内容と研究方法に基づき、讚文類、八閼齋戒儀式、七七齋、臨壙文、変文に関する文献写本の研究によって、宗教儀礼から生み出される諸相を読み解く点にある。そして、儀礼が諸法会、芸能形式と密着に関わっていたため、その民衆への浸透から敦煌仏教の民衆化、俗化の過程と特徴を考察するものである。

本研究は、以下の五つの章によって論を展開する。

第一章「敦煌讚文類文献写本に関する研究」。敦煌文献写本において多数見られた敦煌本讚文類文献より、儀礼を行う際に、非常に讚文を唱える次第を重視することを注目し、唱導や俗講における位置づけを解明し、さらに『太子讚』という題名を持つ写本及び関連写本を例として変文との関わりを検討し、民間に広く伝わっていた状況を見据えながら、様々な儀礼へ浸透・習合し、讚文類は敦煌宗教儀礼の実体としての位置づけを明らか

にし、宗教儀礼の本質と中国伝統的な思想の融合様相を論じる。

第二章「敦煌八閼齋戒文献写本に関する研究」。敦煌文献に見られた八閼齋に関する写本を一覧すると、仏教の民衆への接近を促進させるものであり、その齋会儀礼または儀礼内容の生まれ変わりを通じて、出家仏教者が受持した戒を在家信者も同じように守ることは可能となった。そのため、それらの宗教儀礼文献に記された主要な内容及び儀式作法を考察してみれば、宗教信仰の受容過程を明らかにすることができるだろう。また、当時の敦煌地域における在家・出家、あるいは半僧半俗という宗教実修の様相についてある程度理解できると考える。

第三章「敦煌「七七齋」文献写本に関する研究」。「七七齋」は中国の民間信仰と密接な関係性を持つ宗教儀礼であり、それらの文献を整理することによって、宗教儀礼と民俗融合の様相を検討する。とくに、通俗文学としての講経文、願文や通俗詩に残された記述内容を考察することを通して、宗教儀礼と民衆の関わり、さらにその儀礼が民俗的行為を受け入れながら、通俗化を実現する姿を明確にする。

第四章「敦煌「臨壙文」文献写本に関する研究」。死者の追悼を中心とした臨壙設祭という宗教儀礼に関する「臨壙文」文献を整理しながら、また当時の社会状況、民間信仰などの要素を総合的に考察し、民衆思想を反映するために儀礼の生まれ変わり様子を窺う。さらに、その文献の定型化、また文芸的な要素の増加という変遷から、後世の文学との繋がりを検討する。

第五章「『清平山堂話本』から探る敦煌変文の後世の話本小説に与えた影響」。宋代文学代表的な話本の文体と宗教儀礼に関わる変文の文体を比較することによって、宗教儀礼は完全に宗教色彩を脱却し、通俗文学作品へ展開する急変な様相を捉える。